



Data 2022-124

監督・脚本: デヴィッド・O・ラッセル

出演: クリスチャン・ベール/マーゴット・ロビー/ジョン・ドヴィッド・ワシントン/クリス・ロック/アニャ・テイラー-ジョイ/ゾーイ・サルダナ/マイク・マイヤーズ/マイケル・シャノン/アンドレア・ライズボロー/テイラー・スウィフト/ロバート・デ・ニーロ

👁️👁️ みどころ

トランプ前大統領の登場以降、アメリカではさまざまな“陰謀説”が飛び交っている。しかして、1930年代には、ルーズベルト大統領暗殺と親ヒトラー政権樹立の陰謀が！それってホント・・・？

「BASED ON A TRUE STORY (実話に基づく物語)」は多いが、本作の“ほぼ実話です・・・”を売りにした(?)映画は珍しい。タイトルの『アムステルダム』は、1918年のヨーロッパ戦線に従軍する中で固い絆を結ぶ3人の男女の姿から名づけられているが、それって一体ナニ？

チラシには本年度アカデミー賞有力候補！の文字が躍っており、私には面白かったが、実際の評判はイマイチ。それは一体なぜ？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■本年度アカデミー賞有力候補！こりゃ、必見！■□■

本作のチラシには、「本年度アカデミー賞有力候補！」と書かれている。さらに、「この3人の絆が世界の歴史を変えてしまった。」という見出しの下、(ほぼ、実話です・・・)と書かれている。

本作の主人公は、義眼の男、バート・ベレンゼン (クリスチャン・ベール)、看護婦のヴァレリー (マーゴット・ロビー)、黒人のハロルド・ウッズマン (ジョン・D・ワシントン) の3人。後半からはさらに、ストーリーの軸となるロバート・デ・ニーロ演じるギル・ディレンバック将軍も登場するから、こりゃ必見！

■□■第1次世界大戦勃発！アメリカの参戦は？■□■

2022年2月24日にロシアから侵攻されたウクライナを、西側民主主義諸国は軍事面、経済面で応援しているが、その最大の援助国がアメリカ。しかし、ヨーロッパで起きた第一次世界大戦においては、アメリカは当初「我、関せず」の姿勢を取り続けたが、あ

る時点から急遽方針転換をした。

アメリカからヨーロッパ戦線に派遣された兵士がバートと Harold。しかし、バートは医師を続けたかったのに、名誉を求める妻の父親からの「指示」に従ってイヤイヤ(?) 兵役に。他方、食うために兵士になった Harold は、黒人差別もあってヨーロッパ戦線の現場ではケンカばかり。そんな Harold を納得、心服させ、バートとの固い契りを結ばせたのは指揮官のビル・ミーキンス(エド・ベグリー・ジュニア) だが、これってホント・・・?

さらに、激戦の中で瀕死の重傷を負ったバートを救ったのが、野戦病院で働いていた看護婦のヴァレリー。バートは右目が義眼になってしまったが、ヴァレリーの献身的な看病のおかげで一命をとりとめ、大戦終了後は無事アメリカの妻の元へ戻り、医師として退役軍人たちの世話をする活動に従事した。他方、Harold はアメリカに帰国後、弁護士として活躍したから、立派なものだ。

■□■ 1933年、米国でこんな事件が！こりゃ何かの陰謀？ ■□■

1933年のある日、Harold がリズ・ミーキンス(テイラー・スウィフト) と共に医師のバートに持ちかけてきた依頼は、某人物の検死。それは、ヨーロッパ戦線からの帰国後は上院議員をしていた、父親であるビル・ミーキンスの死亡に、娘のリズ・ミーキンスが疑いを持ったためだ。検死など2回しかやったことのないバートが、やむなく看護婦のイルマ・クレア(ゾーイ・サルダナ) と共に(の主導で?) 検死を行うと、なんと彼の胃の中に毒物があったことを発見したから、さあ大変。レストランで待っているリズ・ミーキンスにその報告をしようとすると、検死の依頼主であるはずの彼女がその場から逃げようとしていたから、アレレ・・・。

しかも、道端で立ち止まった彼女に結果報告をしていると、突然、何者かに突き飛ばされた彼女が車に引かれてしまった上、バートと Harold は「犯人はあいつだ！」と叫ばれたから、警察の追求の前に2人はやむなく逃げ出すことに。これは一体どうなってるの？ これは誰かの、もしくは何らかの組織の陰謀・・・?

■□■ 本作のタイトルは、なぜ『アムステルダム』に？ ■□■

本作では、冒頭に1933年のある日、ニューヨークで起きたそんな事件が提示された後、今はこれほどの親友になっているバートと Harold の回想話として、前述した1918年のヨーロッパ戦線の姿が描かれる。そして、そこにはバートと Harold の絆の中に、紅一点として野戦病院で働く看護婦のヴァレリーが入っていた。

ヴァレリーは銃弾などの破片を1つ1つ取り除くことに長け、しかも、その取り除いた破片でアートを作るという変わった趣味を持っていたが、バートの義眼を世話するについては、そんな彼女の趣味と共に、彼女の意外な“人脈”が大いに役立ったらしい。そんなヴァレリーに Harold がベタ惚れしたのは、ある意味当然。普通の白人女性なら黒人の Harold と恋人関係になるのに躊躇するはずだが、ヴァレリーはそんなことは全く気にしないらしい。そのため、大戦終了後、この3人はそれぞれの母国に戻らず、アムステルダム

での同居生活を始めたが、これはかなり変わった設定だ。

本作のタイトル『アムステルダム』は、そんな一時期における3人の良き日に焦点を当てたものだが、3人の男女によるそんな奇妙な共同生活がいつまでも続くはずはない。結局パートとハロルドはアメリカに戻るようになったが、ヴァレリーのその後は・・・？

■□■この父娘の殺害はなぜ？犯人は？背後の巨大な陰謀は？■□■

トランプ前大統領の登場以来、アメリカでは様々な陰謀論が飛び交っている。それを助長しているのが、トランプ前大統領が愛用していた Twitter だが、その Twitter 自体がマスク氏による買収工作以降、大揺れに揺れている。

それはともかく、本作は『世界にひとつのプレイブック』（12年）や『アメリカン・ハッスル』（13年）で有名なデヴィット・O・ラッセル監督が、世界の歴史を変えてしまった“ほぼ実話”という、ある“陰謀説”に大胆に切り込んだものらしい。そこで最初に見せつけられる陰謀は、ヨーロッパ戦線におけるパートとハロルドの尊敬すべき上官であり、今は上院議員になっているビル・ミーキンスの不審な死亡と、その調査を依頼してきた娘リズ・ミーキンスの突然の死。この父娘の殺害はなぜ？

さらに、奇妙なのは、その犯人がパートとハロルドの2人とされたことだ。そんな陰謀を企み、動かしているのは一体誰？長い導入部を経て、やっとそれが本作のメインテーマだとわかるが、その時点以降のパートとハロルドの巻き返し（調査）は如何に？背後には一体どんな陰謀が？

■□■調査中に思いがけない再会が！これは一体なぜ？■□■

調査活動の第一歩は、ある情報を得た2人が、裕福なトムとリビー夫妻が怪しいと睨み、ある日その屋敷に乗り込むこと。ところが、なんとそこであつと驚く再会を果たしたのが、ヴァレリーだ。大戦終了後に過ごした、あの良きアムステルダム時代から10数年。「なぜここに？」。お互いそんな会話を交わしたのは当然だが、ひよっとしてヴァレリーもビル・ミーキンス殺しの陰謀に関与しているの？いやいや、そんなバカな！

本作の評価は『キネマ旬報』11月下旬号の「REVIEW 日本映画&海外映画」では、星3つ、2つ、3つと低い。また、ネット情報によると、「本作は興行面でも批評面でも大コケしており・・・」と書かれている。その原因は多分、本作中盤に見る、3人の思いが切ない再会物語のわかりにくさにあるのだろう。あんなに2人と仲の良かったヴァレリーがアムステルダムでの良き日々の後、忽然と姿を消してしまったのは一体なぜ？そんなヴァレリーが、なぜ今、トムとリビー夫妻の屋敷にいるの？

ヨーロッパ戦線で懸命に戦闘に従事しながら大きな傷を受けて帰国してきた兵士たちに対するパートの医師としての活動は今や彼のメイン活動になっていた。かつては、妻の父親の威光の下でしかできなかった彼の医師としての活動は、今では自分の思うがままだ。そんなパートは、今、兵士たちの集まりでのスピーチを、亡ビル・ミーキンス上院議員に代わってギル・ディレンバック将軍（ロバート・デ・ニーロ）に依頼しようとしていた。

日本でも日本遺族会は自民党を中心に隠然たる勢力を持っているが、それはアメリカでも同じだ。さあ、そんな活動の中、パートとハロルド、そしてヴァレリーはいかなる陰謀に巻き込まれていくの？本作中盤から終盤にかけてのそんなストーリーもかなりわかりにくいが、さてあなたの評論は？

■ギル・ディレンバック将軍をめぐる陰謀とは？■

トム・クルーズがナチスドイツの高官役を演じ、ヒトラー暗殺と新政権樹立のクーデター計画の中心役を果たした面白い映画が、『ワルキューレ』（08年）（『シネマ22』115頁）だった。ワルキューレ計画は実話そのものだったが、本作が描く“ほぼ実話”とは一体ナニ？

それは、裕福な実業家による「5人委員会」なる組織がフランクリン・ルーズベルト大統領を暗殺し、親ヒトラー政権（ファシズム政権）を樹立する軍事クーデターを計画していたというもの。その軍事クーデターで、ルーズベルト打倒後のヒトラー役に指名されたのがスメドリー・バトラー将軍で、彼はその“事実”を議会の委員会で証言しているらしい。そのバトラー将軍役を、本作では、ロバート・デ・ニーロがギル・ディレンバック将軍役として演じているので、それに注目！バトラー将軍が議会の委員会で証言する姿は本作ラストでもスクリーン場に登場するが、問題はその証言にどこまで信憑性があるのかということ。そこらあたりが曖昧なまま本作を作っているため、本作は「BASED ON A TRUE STORY」ではなく、“ほぼ実話です・・・”と曖昧な表現になっているわけだ。

しかし、本来、映画作りはもっと自由だったのでは？そうであれば、“ほぼ実話・・・”にこだわらず、大胆に脚色することも可能だったはずだ。その点、本作の出来は如何に？

2022（令和4）年11月22日記